

不登校の子の味方になる教師



公立中学校長

吉本 恭子

よしもと きょうこ 養護教諭から高知市教育委員会指導主事、班長を経て公立中学校の教頭。2017年から現職。学級経営やチーム援助について研究。現在は30分ブリーフ・ミーティング、問いを創る授業、蓄積データ、スクールワイドPBSの実践的研究に取り組んでいる

子どもと出会う前のリソース探し

「どうすればうまくいくか」を一緒に考えよう」のできる一年に

私たちは不登校の子どもと出会ったときに「どうしてこの子は学校に行けなくなったのか」と考え、学校に行けない理由や原因を探すことに多くの時間を費やしてきました。原因を追究してその原因を解決するという治療モデルは、医学の世界では当たり前のことです。しかし、教育の現場では、たとえ原因が特定されても解決できない場合のほうが多いということも実感しています。例えば、Aちゃんが昨年の一〇月から突然学校を休み始めたのは、「大好きなおばあちゃんが亡くなってしまったから」という原因がわかったとしても、おばあちゃんに生き返ってもらうことはできません。

この連載では、問題や原因については深追いせずに、これから（未来）のことについて焦点を当て「どうなっていればいいのか」を考え、「どうすればうまくいくか」を提案していきたいと思っています。初回は、そのよりよき未来を手に入れるときに役立つ「リソース」について

考えます。

人はすべてリソースをもっている
リソース探しの名人に

リソースというと、私たちはすぐに「役に立つもの」と考えてしまいがちですが、「役に立つ／立たない」ではなく、その人自身も持っているものや周囲にあるもの、すでにできていることなどをすべてがリソースです。森俊夫著『ブリーフセラピーの極意』（ほんの森出版、二〇一五年）には、「リソース」とは、個人の中にある力（能力）、興味や関心（好きなこと）、すでにやれていること（以上は「内的リソース」）、および、個人の周辺にあつてその個人を支えている人々、生き物（ペットや植物など）、物（以上は「外的リソース」）のことであると述べられています。そして、私たちが問題だと思っていることの周辺にもリソースがある場合があります。不登校の子どもの状態について語るとき、私たちは往々にして「〜できない」「〜が苦手」などという言い方になりがちです。例えば「人から見られるのが苦手」「朝起きられない」「勉強するの

が苦手」などです。でも、ほんの少し枠組みを変えてみると、「家で本をたくさん読んでみる」とか「毎日欠かさず犬の散歩に行く」など、日常のごく普通の生活の中に、リソースをたくさん見つけることができます。

担任として、今まで気づかなかった（気にも留めていなかった）ことの中に、リソースはたくさんあります。担任のリソース探しの技は、何も不登校の子どもに限ったことではなく、日常場面でも活用できます。日常場面で活用することによって、子どもの行動をよりよいねいに観察し、リソースを見つけようとする態度が身につきます。やがて「本人にとっての課題はリソースにもなり得る」ことを実感できるようになります。

例外探しから解決の始まりを見つける 引き継ぎから何を読み取るか

「『例外』とは、すでに起こっている解決の一部である」というのが解決志向ブリーフセラピーの定義です。私たちはともすれば、子どもの状態を語るときに「いつも…」「何をやっても…」などと、すべ

ての時間や場面においてうまくいっていないという認識に陥りがちです。しかしよく考えると、「授業中いつも保健室に来るけど、図工の時間だけは教室で授業を受けている」「音楽の授業のある日はいつも登校している」など、うまくいっていること（とき）もあるのが気がつきます。うっかりすると見逃してしまいそうなことですが、実は「例外」が解決の始まりになっている、そこにこそリソースがあるというのが解決志向ブリーフセラピーの考え方です。この小さな例外を探して増やしていくことで、それが拡大していけばきつと日常生活も変化していき、もはや例外とは言えないような状態になっていくのではないのでしょうか。

不登校の子どもと初めて出会うときに、「問題を抱えた子ども」として出会うのではなく、「リソースをたくさんもった子ども」として出会うと、ワクワクしてきませんか？ ぜひ前年度からの引き継ぎを受け取ったときに、この例外探しをやってみてください。

例外を見つげるときのコツは「いつもかな？」「ずっとそうなのかな？」「誰と

でもそうなのかな？」などと、事実を細かく知ることです。そうすると、意外にできていること（とき）のほうが多いのに気がつきます。そのことを子どもと確認できたなら、次は「それはどうやってやったの？」「何がよかったの？」と、うまくいった理由を聴きます。この「追及」をすることで、さらにリソースはどんどん増えていきます。

教師自身のリソースも知っておく 不登校支援のアイテムボックス

ここまで子どものリソースについて書いてきましたが、リソースは子どもだけのものではありません。私たち大人にもたくさんあります。子どもと同様、自分のリソースを支援にどう活かすかで、未来は大きく変わってくるのです。

「私にはリソースなんて何もないわ」と思っておられる方、55ページのワークシートにちょっと書いてみませんか。改めて自分を見つめる機会にもなります。

このシートに書き出したリソースが、あなたと子どもをつなぐ架け橋の役目を果たしてくれます。何もないところから

始めるのではなく、「あるもの」を手がかりに考えることで、「これならできそう」と思えてくるから不思議です。

入学式までのチャンスを活かす

子どもとあなたのリソースを見つけたら、準備は完了。四月の最初はチャンスイベントがたくさんあります。これらを活用してできることを少し紹介します。

担任であることを紹介する場面

以前は始業式までは担任発表でできないという考えの学校もありましたが、今は多くの学校で、不登校などで新学期を不安な気持ちで迎える子どもには、始業式を待たずに担任の紹介をする場合が増えています。本校でも職員会や学年会を経て受け持つクラスが決まったら、できるだけ早く連絡するようにしています。

このときのキーワードは「安心」です。子どもが「この先生となら一年間うまくやっていけそう」と思えるような出会いになるよう私が気をつけているのは、次の三つです。一つ目は、当たり前のことですが「笑顔」です。優しい笑顔で接し

てもらえれば、子どもはそれだけで安心します。二つ目は、話しかけるときに、決めつけたような（威圧的な）言い方にならないように気をつけています。少し語尾を上げて「どうしたいの？」「何ができそう？」と本人の気持ちを見ていねいに聴き取ります。三つ目は、目線の高さです。特に小学校低学年など身長の高い子どもと話す場合だと、こちらが子どもを見下げるような位置関係になります。それだけで「大きくて怖い」という印象をもってしまうときもあります。まずはしやがんで、子どもと同じ高さの目の位置になってから話し始めます。

入学式（始業式）シミュレーション

最初の日に登校できれば、一年間のいい変化のきっかけをつくることのできるかもしれません。でも、不登校の子どもにとって、大勢が集まる「式典」は緊張する行事でもあります。そこで、事前にシミュレーションをします。入学式前日、式場の用意が整った時間に親子で来てもらい、実際の式のように呼名をして名前を呼ばれたら起立して返事をしたり、礼をしたりする練習をやっておきます。

始業式も同様です。教室の自分の席に座るところから始まります。最初は緊張の表情を見せていても徐々に慣れてきます。

これのもう一つのいいところは、シミュレーションに同席する校長や教頭、教務主任、学年の他の教員など一度にたくさん先生の先生と知り合いになれることです。

そつと子どもの心のドアをたたく

「今日からあなたの味方だよ」

子どもとの出会いの場面はイメージできましたか。どんなリソースを見つけていることができましたか。たった一つでもいいのです。そのリソースがどうして生まれたかを聴いていくことで、次のリソースが見つかります。相手に入らないほめ方は白々しく嘘っぽいものになります。本心からそう思って伝えることができれば、子どもの心の中にすうっと入っていきます、生きるエネルギーとなるでしょう。

子どもは「自分のことを認めてくれる（わかってくれている）」存在がいるだけで成長できます。担任がそのような存在になれたなら、きつと一歩前へ足を踏み出せることでしょう。



不登校支援のアイテムボックス



自分のトースを書き出してみましょう。

自分の性格

毎日の習慣

好きな時間

ペットや育て
ている植物

子どもとの
関係づくりの
ツール

自分を支えて
くれている人
相談できる人

興味や関心
(好きなこと)

その他何でも